

中原暢子設計の茶室小間と本歌の差異

—建築家・中原暢子の茶室に関する研究1—

深石 圭子

建築家中原暢子の茶室設計に対する考え方を明らかにするには、小間・広間・水屋等の構成、及び露地との関連性を明らかにする必要がある。本稿では、その中でも小間を取り上げ、「森邸」茶室三畳台目、自邸「茶室のある家」茶室二畳台目及び「大野邸茶室」茶室三畳台目と各々の本歌との比較を行い、その差異を明らかにすることで中原の小間設計に対する考え方を明らかにする。

結果、基本的には、本歌を忠実に再現しようと試みているものの、細部においては大胆な差異がみられた。「森邸」茶室三畳台目では、板畳を設けない代わりに新たに茶道口を追加、自邸「茶室のある家」茶室二畳台目では、照明や空調等の設備的な面を改善し、「大野邸茶室」茶室三畳台目では、床の間脇にある壁面の吹抜きをなくした代わりに、点前座の奥に採光のための下地窓を配置している。以上のことから、亭主としての使い勝手を重視した設計がされていることが明らかになった。

キーワード：中原暢子 小間 写し 本歌 差異

1. はじめに

建築家中原暢子（1929-2008）（以下、「中原」という）は、林雅子（1928-2001）、山田初江（1930-）と共に設計事務所「林・山田・中原設計同人」を設立し、44年にわたり住宅を中心とした設計活動を行ってきた。事務所では、共同設計は行わず、場所、所員は共有するスタイルで経営していた。

中原は、生涯に少なくとも26室もの茶室設計に取り組んだ。3室の茶室をもつ自邸「茶室のある家」は建築雑誌に掲載された数少ない作品のうちのひとつであり、中原の代表作ともいえるものである。

また、40歳前後から茶道を習い始め、表千家として「宗暢」の茶名を受け、多くの弟子を育てた。自邸では、自ら積極的に茶会を開き、茶道教室や懐石料理教室を行うなど、自身の客をもてなす側に立った亭主や裏方としての幅広い活動を

行った。

1-1 中原設計の小間の写し

中原は、少なくとも3作品の小間を写しとして実現しているとみられる（表1）。

表1 中原が設計した写しとみられる小間

建築名（設計年）	室名称	畳の数	本歌
「森邸」（1987）	茶室三畳台目	平三畳台目	表千家「不審庵」
自邸「茶室のある家」（1985）	「暢庵」茶室二畳台目	二畳台目	堀内家「長生庵」
「大野邸茶室」（1990）	茶室三畳台目	深三畳台目	江戸千家「一円庵」

「写し」とは、原本を写した書画類、原品になぞらえて造った茶道具類、原型を模した茶室などをいう。この場合、もともとあったものを「本歌」という¹⁾。

本稿において、何を以って「写し」とするかは、

材料や寸法、図面による意匠が同一であるか否かと定義付ける。

1-2 目的

中原の茶室設計方法を明らかにするには、小間・広間・水屋等の構成、及び露地との関連性を明らかにする必要がある。本稿では、小間に焦点を当て、特に写しの性格が強い3作品の小間について本歌との差異を明らかにすることによって、中原の小間設計に対する考え方を明らかにする。

1-3 方法

根岸照彦著『茶室の解明 平面データ集成』(2001.11)に掲載の実在する古今のさまざまな1,159件の茶室の中から、畳の構成、炉の切り方が同じ形式であり、かつ中柱があるものを抽出し、表にまとめ、中原設計の本歌の写しと思われる「森邸」茶室三畳台目、自邸「茶室のある家」茶室二畳台目、「大野邸茶室」茶室三畳台目の位置付けを行う。そして、それらと各々の本歌である茶室の建築図面等を用いて比較を行い、その差異を明らかにする。

2. 「森邸」茶室三畳台目

中原は、1987年に木造2階建ての専用住宅である「森邸」を設計している。その東南の角には表千家「不審庵」を写したと思われる三畳台目の茶室が隣接している。

2-1 上座床三畳台目の茶室

中原が設計した「森邸」茶室三畳台目の平面形状は、平三畳台目中柱台目切である。床の間位置は、上座床である。上座床とは、点前座に亭主が座してその前方(左手)に床の間が位置するものをいう。平三畳台目とは、点前畳から丸畳を横並びとして横長敷いた茶席のことをいい、台目切とは、点前畳に接した外側の畳を切る出炉のうち、点前畳が台目畳で点前畳の長辺を二等分した位置から上座側に切られ、点前畳の炉の先が小間中(京畳1/4間、1/4畳)になる炉の切り方をいう。

「不審庵」を含む主な上座床平三畳台目中柱台目切茶室は以下の表の通りである(表2)。三畳

台目としては129件存在するが、上座床平三畳大目中柱台目切に限ると表千家「不審庵」を合わせて7件が該当した。

平三畳台目の場合、躰口正面に床の間を配置するのが一般的だが、「森邸」茶室三畳台目は躰口の右に床の間がある。これと同じ形式は、古文書に掲載されている「座敷三畳大目」のみであり、極めて特殊な入り方であるといえる。

表2 上座床平三畳台目中柱台目切茶室

茶室名	造営	好み (創建者)	茶道口数と その場所	床の間と躰 口の関係
「座敷三畳大目」	不明 (古文書)	不明	1 下(南)	躰口右
「利休三畳台不 審庵」	不明 (古文書)	千利休	1 上(北) 板畳	躰口正面
表千家 「不審庵」	大正以前 (1913年再 興)	千利休	1 上(北) 板畳	躰口正面
浅草寺伝法院 「天祐庵」	天明年間 (1781-89)	牧野作兵衛	1 上(北) 板畳	躰口正面
弘月邸 「審悦庵」	不明	不明	1 上(北) 板畳	躰口正面
久保邸 「惣庵」	1937-1940	久保惣太郎	1 上(北) 板畳	躰口正面
「実修庵」	不明	不明	1 左(西)	躰口正面
「森邸」茶室 三畳台目	1987.2 設計	中原暢子	2 上(北)・ 左(西)	躰口右

2-2 「不審庵」について

「不審庵」は、千家二代少庵(1546-1614)が、本法寺前の地に千家を再興する際、深三畳台目と三畳敷道安間の茶室を建て、これら二つの茶室のいずれかに「不審庵」の額が掲げられていたと伝わる。三代宗旦(1578-1658)は、一畳半を造立して「不審庵」としたが、これを継承した四代・表千家初代江岑宗左(1913-1967)は父宗旦とはかり、不審庵を平三畳台目に建て替えたという歴史をもつ。「不審庵」は表千家の通称とされており、現在の茶席は、1913年に再建されたものである²⁾。

「不審庵」の忠実な写しとしては、最古のもので天明年間(1781-1788)造営の浅草寺伝法院「天祐庵」がある。昭和33(1958)年に現在の地に移築した³⁾。

2-3 「森邸」茶室三畳台目の材料や寸法等による比較

「森邸」茶室三畳台目と「不審庵」を材料や寸法等で比較すると、次のようになる（表3）。

表3 「森邸」茶室三畳台目と「不審庵」の材料や寸法等による比較（単位：尺）

茶室名		「森邸」 茶室三畳台目	「不審庵」
所在		東京都杉並区 森邸内	京都府京都市 表千家邸内
建設時期		(設計：1987.2)	1646年（原型） 1913年再建
方位	開口	東	南
勝手		本勝手	本勝手
床の間	形式	本床（畳敷）	本床（畳敷）
	位置	上座床	上座床
	床框	(不明)	桧丸太半割
	床柱	(不明)	赤松丸太
		径	(不明)
			0.30
炉	種類	台目切	台目切
	中柱	赤松皮付	皮付女松
	径	0.18（直）	0.18（直）
	吹抜高	約2.00	2.26
袖壁	釣棚	二重棚、桐	二重棚、女竹、 桐材
天井	床の間	杉鏡板張	鏡天井
	台目	掛込天井 ノネ板竹竿	掛込天井
	床前	竹竿ガマ	竹棹縁蒲天井
	開口前	掛込天井 ノネ板竹竿	掛込天井
	突き上げ窓	有 約1.32×約0.92	有 約1.45×約1.20
開口	高×幅	2.20×2.00	2.26×2.05
茶道口	高×幅	5.00×2.10	5.80×約2.00
	建具	方立口、釣襖	方立口、釣襖
給仕口	高×幅	5.20×1.92 ※1	3.90×1.94
	建具	火灯口、和紙タイ コ貼	火灯口
下地窓1 (炬燵脇)	高×幅	2.00×1.80、力竹	約1.82×約2.05、 力竹
	畳からの高	1.45	1.40
下地窓2 (開口上)	高×幅	2.40×2.40、力竹	2.40×約2.21、力 竹
	畳からの高	2.34	約2.27
下地窓3 (点前座脇)	高×幅	1.50×1.20、力竹	1.60×約1.60、力 竹
	畳からの高	約3.90	4.00
連子窓	高×幅	2.00×4.25	約2.02×約4.75
	畳からの高	2.48	約2.47
壁	仕上げ	(不明)	(不明)
	腰貼	みなと紙	湊紙
	腰貼高	約1.40、約0.90	1.80、1.40
参考資料		中原暢子：『森邸 新築工事設計図』 (1987)	北尾治道：『茶室 の展開図』(1970)

※1 高さ寸法が、図面との比較により誤植と考えられる。

「森邸」茶室三畳台目は、炬燵脇にある下地窓1が高さ2尺、幅1尺8寸と若干縦長である。また、点前座脇の高所にある下地窓3についても幅が1尺2寸で、縦長である。

若干の数値的な違いはあるものの、天井や壁の材料、棚の形式及び下地窓に力竹を設けるなど、採用した材料はほぼ同一である。

2-4 「森邸」茶室三畳台目の図面による比較（表4）

平面図をみると、「森邸」茶室三畳台目の開口は、「不審庵」とは異なり東壁面にあることが確認できる。そのため開口上に位置していた下地窓2も開口と共に東壁面へ移動し、その結果、東壁面にあった連子窓は、南壁面に計画されている。また、「不審庵」の特徴である台目畳に付した幅5寸1分の板畳は、「森邸」茶室三畳台目にはみられない。さらに、水屋に直接つながる出入口として、釣襖の茶道口の他に、点前座の背後にも高さ5尺、幅2尺6寸の引戸が設けられている（図1）。

開口の配置を東に変更したのは寄付と露地、茶室の位置関係からやむを得ない変更であったと思われるが、結果開口から床の間を正面にみる構成を犠牲にしている。また、「不審庵」の板畳は、点前のしやすさのために設けられているが、「森邸」茶室三畳台目は、板畳を採用しない代わりに幅広の台目畳を採用している。それでも点前座の幅は本歌より狭い。特に夏秋に用いる風炉の場合、「森邸」茶室三畳台目では、釣戸への出入りが難しくなる。そのため、点前畳背後にある引き戸の茶道口を新たに設けたのではないかと推察でき

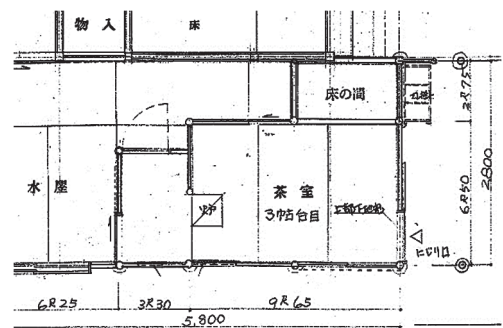


図1 「森邸」茶室三畳台目と水屋平面図

表4 「森邸」茶室三畳台目と「不審庵」の図面による比較

茶室名	「森邸」茶室三畳台目	「不審庵」
平面図（北が上）		
西展開図		
南展開図		
北展開図		
東展開図		

る。通常は1つである茶道口を2つにすることで、亭主の使い勝手を良くしている。

以上のことから、「森邸」茶室三畳台目は、「不審庵」の完全な写しではないことが明らかになった。

2-5 まとめ

不審庵は、表千家の象徴であり、これを自宅の

茶室に写したいと考える茶人は多いと考えられる。しかし、風炉先から入る点前座は極めて特殊でこれを写すことは非常に困難であったと思われる。

「森邸」茶室三畳台目と「不審庵」との差異を以下にまとめる。

- ① 炉畳南面にある下地窓1は縦に長く、幅についても、1尺8寸と若干短い。

- ②点前座脇の高所ある下地窓3についても縦長であり、幅も1尺2寸と若干短い。
- ③躰口を東面からとっているため、躰口上部にあった下地窓も東面配され、東面にあった連子窓と入れ替わっている。
- ④点前畳のみ幅3尺3寸という他の丸畳に比べ幅の広い台目畳を採用している。しかし、「不審庵」の点前座幅は、板畳を含めても約8尺8寸ほどであり、本歌より狭い。
- ⑤茶道口は、北側の釣襖の他に、躰口正面に位置する引戸が配置されている。

不審庵は、平面図でみるように戻り茶道口であり、点前の仕方が特殊である。『不白筆記』の「不審庵の仕様」には、「一 風炉ハ中柱より外の畳へ常ノ通り置付ル。此時香合ハ、下ノ棚ニ飾ル。横竹ノ下より取り申候。」⁴⁾とあり、風炉の時期の点前について述べられている。中原の遺品の中から、中原が主宰していたと思われる暢庵茶事教室の中で行った『不白筆記』の写しが見つかることから、中原はこれを踏まえて新しい茶道口を付したと考えられる。

3. 自邸「茶室のある家」茶室二畳台目

中原は1985年に一部鉄骨造とした木造2階建て、3室の茶室（八畳の広間2室、二畳台目の小間1室）を有する自邸「茶室のある家」（現存せず）を設計しており、1階は茶室や水屋の他、寄付として使うこともできる応接室、茶懐石に対応できる台所等茶の湯に関するスペースであり、2階は

個室や浴室等のプライベートな住空間を中心に展開している。そして、1階にある小間「暢庵」（図2・写真1）は表千家堀内家「長生庵」を写したものであることが明らかになっている。「現代住宅の中に、茶室草庵の空間構成をもう一度活かしてみたい」という当時の中原の課題⁵⁾が具現化された作品であった。中原が主宰していたと思われる暢庵研究会の指導は、表千家堀内家の千葉宗立から受けていることが判っている。さらに中原は、自邸を設計するために大工等職人と一緒に堀内家「長生庵」にて実測調査を行い詳細な実測図を残している（図3）。

また、中原は、自邸の全ての茶室に床暖房を設置している（図4）。電気の薄型畳ヒーターを畳表の下に仕込み、畳の踏み心地に違和感がないよう配慮していたという⁶⁾。自邸の冷暖房は茶室を含め、台所で集中管理可能となっている。

「暢庵」の床の間や突き上げ窓に蛍光灯を仕込



写真1 「暢庵」内部

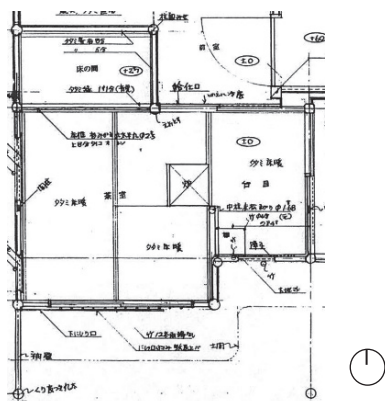


図2 「暢庵」平面図

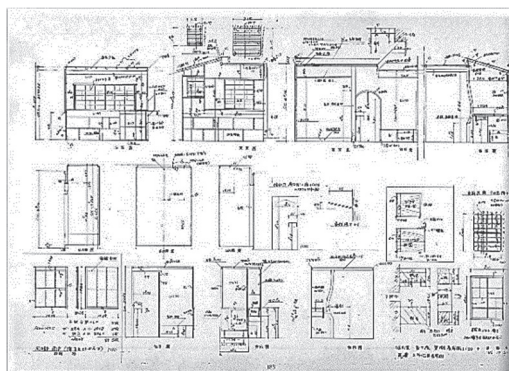


図3 中原による「長生庵」実測図面と「暢庵」の図面

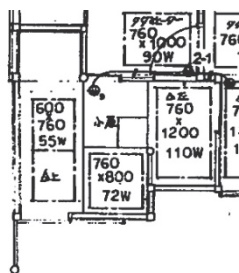


図4 「暢庵」床暖房工事設計図

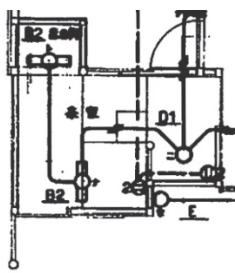


図5 「暢庵」電気配線図・コンセント図

み、茶室内にもコンセントを設置する等、近代的な対応をとっている（図5）。

3-1 二畳台目の茶室

中原が設計した「暢庵」の平面形状は、二畳台目中柱台目切である。二畳台目とは、丸畳二畳と台目畳一畳で構成された茶席のことをいう。

主な二畳台目中柱台目切は以下の表の通りである。二畳台目の茶室計46件のうち、中柱台目切の茶室は10件であった（表5）。二畳台目中柱台目切かつ、躰口正面に床の間があるのは、半数の5件である。

表5 二畳台目中柱台目切茶室

茶室名	床の間位置	造営	好み (創建者)	床の間と躰口等の関係
「数寄屋 式畳大目」	上座床	不明 (古文書)	不明	躰口正面
「織部数寄 式畳大目」	下座床	不明 (古文書)	古田織部	躰口左
「有楽園」	下座床	不明 (古文書)	織田有楽	貴人口左
「数寄屋」	亭主下座床	不明 (古文書)	不明	躰口左
建仁寺 「東陽坊」	下座床	天正年間 (1573-93)	千利休 小堀遠州	躰口左
大徳寺高桐 院「松向軒」	下座床	江戸時代 (1603-1869?) 初期	細川三斎	躰口正面
南宗寺 「実相庵」	下座床	江戸時代 (1603-1869?)	千利休	躰口正面
大徳寺真珠 庵「庭玉軒」	下座床	寛永年中 (1624-45)	金森宗和	貴人口左
堀内家 「長生庵」	下座床	18世紀(1701- 1800)初期	堀内仙鶴	躰口正面
大樋家 「陶土軒」	下座床	1992 再建	鵬雲斎	躰口正面
自邸「茶室 のある家」 「暢庵」	下座床	1986.4	中原暢子	躰口正面

3-2 「長生庵」について

「長生庵」（図6・写真2）は、表千家堀内家を代表とする堀内仙鶴⁷⁾好みの茶室である。18世紀初期に建設されたが、現存するものは1969年に再建されたものである。下座床で、躰口は南側に付き、茶道口のほかに床脇に給仕口を設けている。炉は台目切で、点前座の中柱には赤松の皮付ゆがみ丸太を用い、壁留めには竹を使う。風炉先右側に二重の釣棚がある。窓は西に下地窓二か所、南の躰口上に連子窓、風炉先に下地窓をあけている。天井は躰口上部が掛込天井、床前が平天井、点前座が落天井という三段の構成になり、掛込天井に突き上げ窓をあける⁸⁾。二畳台目の標準型といわれている。

3-3 「黙雷庵」について

「長生庵」の図面とほぼ同じ形式のものに江戸千家の二畳台目茶室「黙雷庵」がある。そこで、「黙雷庵」の調査を行った。「黙雷庵」（図7）は、江

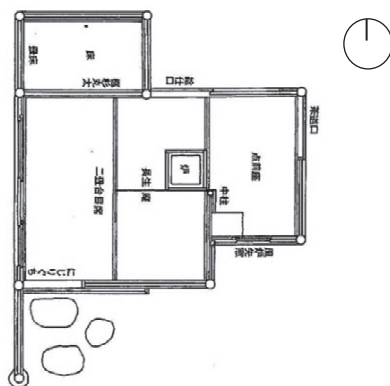


図6 「長生庵」平面図

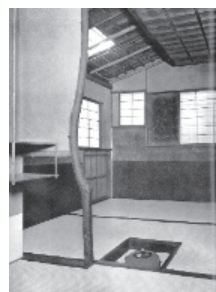


写真2 「長生庵」内部

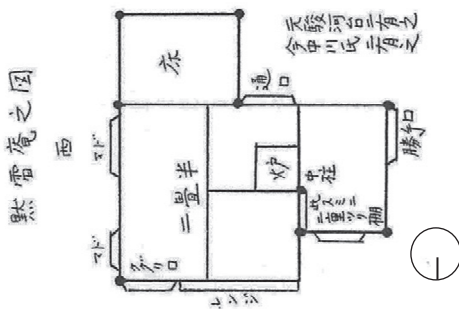


図7 「黙雷庵」平面図

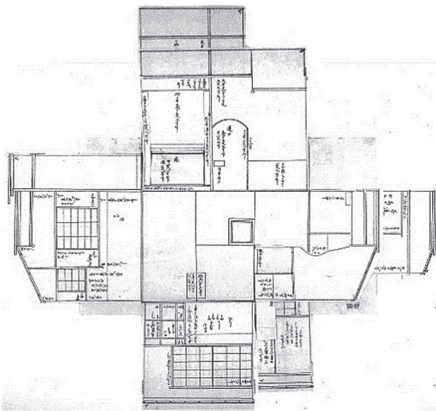


図8 「黙雷庵」起こし絵図

戸千家の祖川上不自(1719-1807)が帰任して最初に建てた利休好みの茶室(現存せず)であり、文献のみで知ることができる。建設は宝暦(1751-64)前期⁹⁾とされており、現在の東京千代田区神田駿河台に建てられた。『囲おし図』に収録されている起こし絵図(図8)¹⁰⁾からその詳細を読み取ることができた。南向き¹¹⁾、下座床で点前座勝手付に茶道口、床脇に給仕口、床正面に躡口があけている¹²⁾。「黙雷庵」に掲げていた額は、川上不自の師表千家七代如心斎(1705-1751)¹³⁾の筆で、杉板に「黙雷」の2文字が白く書かれていたという。

川上不自は、1773年神田明神に「蓮華庵」(三畳台目切道安間)に移り住み、「黙雷庵」は、しばらくして神田藩主中川修理太夫の江戸屋敷に移された¹⁴⁾とされる。なお、現存する池之端の「蓮華庵」は、八代一元斎(1884-1944)が昭和のはじめに復原したものである。

3-4 「暢庵」の材料や寸法等による比較

二畳台目中柱台目切の「暢庵」、「長生庵」及び「黙雷庵」の各部分の形式や材料、寸法による比較をすると、次のようになる(表6)。「暢庵」と「黙雷庵」の給仕口の高さは3尺9寸2分と同一で、「長生庵」より若干低い。多少の寸法の違いはあるものの、かなり厳密に写されており、材料についてもほぼ違いはみられない。

3-5 「暢庵」の図面による比較

3つの二畳台目を図面により比較(表7)すると、平面図は、畳の敷き方や炉の位置、躡口と床の位置関係、茶道口、給仕口に至るまで同一であった。中原は自邸の「暢庵」にて忠実に「長生庵」の写しを行っていることが確認できた。

次に「暢庵」と「長生庵」の比較を詳細にみる。「長生庵」南展開図の連子窓敷居は、連子窓のところで切れているのに対し、「暢庵」は、柱まで伸びている。この連子窓は、引違いの障子となっており、敷居を伸ばさなくても開口は可能である。また、同連子窓の鴨居は伸びていない。また、構造的な意味合いで柱間に敷居を通したとも考えづらい。そのため、これは機能を伴わない中原の意匠を表した設計であると思われる。

よって「長生庵」と「暢庵」は、細部についても忠実に再現されており、丹念に読み取った様子がみとれる。

続いて、「長生庵」と「黙雷庵」を比較すると、連子窓の位置に大きな違いをみることができる。南展開図にある連子窓の位置が、「長生庵」はほぼ中央に配置しているのに対し、「黙雷庵」は、点前座側に寄せて配置されている。また、西展開図の二つの下地窓の高さ関係が、「長生庵」は、躡口側の小さな下地窓の上辺が若干上がっており、「黙雷庵」は、同窓が下がっていることが分かった。

中村昌生は、「黙雷庵」を「長生庵」と比較し、「仙鶴は覚々斎の門下であり、覚々斎のあとをうけた如心斎の弟子不自との間の作風上の脈絡がこの二つの茶室にあらわれているともみられよう。」¹⁵⁾と述べている。

表6 「暢庵」、「長生庵」及び「黙雷庵」の材料や寸法等による比較（単位：尺）

茶室名		「暢庵」	「長生庵」	「黙雷庵」
所在		埼玉県浦和市 (現さいたま市浦和区)	京都府京都市	東京都千代田区 (駿河台)
		中原自邸内	堀内家邸内	(周辺は武家屋敷)
建設時期		1986年4月(現存せず)	18世紀(1701-1800)初期 天明年間(1781-89)と元治年 間(1964-65)に焼失、明治2 (1869)再建	宝暦(1751-64)前期(現存せず)
方位	躰口	南	南	南
勝手		本勝手	本勝手	本勝手
床の間	形式	本床(畳敷)	本床(畳敷)	本床(畳敷)
	位置	下座床	下座床	下座床
	床框	杉みがき丸太	杉北山磨丸太	(不明)
	床柱	赤松皮付丸太	赤松丸太	(不明)
	径	(不明)	0.28	(不明)
炉	種類	台目切	台目切	台目切
袖壁	中柱	赤松皮付(曲)	赤松丸太(曲)	(不明)(曲)
	径	0.18	(不明)	(不明)
	吹抜高	2.10	2.10	2.30
	釣棚	二重棚、桐、竹	二重棚、竹	二重棚
天井	床	杉鏡板張、平天井	鏡天井、平天井	鏡天井、平天井
	台目(点前畳)	シノ竹蒲天井、落天井	棹縁竹蒲天井、落天井	黒べ杉押フチ竹、平天井
	床前	シノ竹ノネ板天井、平天井	白竹棹縁野根板天井、平天井	蒲、落天井
	躰口前	掛込天井	掛込天井	掛込天井
	突き上げ窓	有 約1.60×約1.20	有 約1.80×約1.10	有 1.80×1.40
躰口	高×幅	2.28×約2.20	2.20×2.00	2.40×2.50
茶道口	高×幅	5.19×2.20	5.10×2.10	5.00×2.00
	建具	方立口、タイコ襖	方立口、タイコ襖	方立口
給仕口	高×幅	約3.92×約1.80	4.30×2.00	3.93×1.90
	建具	火灯口、タイコ襖(白和紙)	火灯口、タイコ襖	火灯口
下地窓1 (床前)	高×幅	2.44×2.30、力竹	2.20×約2.0、力竹	2.10×2.00、力竹
	畳からの高	2.49	約2.20	約2.00
下地窓2 (躰口前)	高×幅	1.61×1.35、力竹	1.50×約1.30	1.60×1.30、力竹
	畳からの高	3.42	3.40	3.30
	隅柱からの距離	約0.32	約0.40	0.44
下地窓3 (風炉先窓)	高×幅	1.61×約1.30、力竹	1.60×約1.20、力竹	1.63×1.30、力竹
	畳からの高	約0.60	0.60	0.56
連子窓	高×幅	2.00×4.74	2.10×4.80	約2.00×4.85
壁	仕上げ	京壁、ジュラク	(不明)	(不明)
	腰貼	灰色2段・白1段	湊紙	コシ紙ミノカミ
	腰貼高	1.80(2段) 0.95(1段)	1.80(2段) 約0.90(1段)	1.83(2段) 0.91(1段)
参考資料		中原暢子：「茶室のある家」『新建築 住宅特集』(1986.10)	北尾治道：『茶室の展開図』(1970)	覃斎儀卿：『閑おこし図』(出版年不明) 中村昌生：「川上不自の茶室」、『川上不自の茶』(1991.7)

表7 「暢庵」、「長生庵」及び「黙雷庵」の図面による比較

茶室名	「暢庵」	「長生庵」	「黙雷庵」
平面図（北が上）			
西展開図	 ※西展開図に床の間の表記なし		
南展開図	 ※南展開図は、2 図面に分けて表記		
北展開図			
東展開図		 ※2	

※2 引手位置は、平面図や写真との照らし合わせにより、誤植と考えられる。

3-6 まとめ

「暢庵」と「長生庵」、「黙雷庵」の差異を以下にまとめる。

- ①「長生庵」との比較では、給仕口の高さが若干低い。
- ②「長生庵」との比較では、風炉先窓が若干吊棚寄りに配置されている。
- ③連子窓の窓台が柱まで伸びている。
- ④「黙雷庵」との比較では、南面連子窓が中心に配置されている。

自身の要望を実現できる自邸の設計では、他の写しと思われる作品よりも、本歌を最も忠実に再現していた。修理報告書などを参考にして構法の一部変更して補強を行っているが、寸法としては全くの変更がない。ただし、床の間や突き上げ窓に蛍光灯を仕込み、コンセントを設置するなど、設備面での積極的な対応がされている。

4. 「大野邸茶室」茶室三畳台目

中原は、1990年に母屋とは別棟の茶室を「大野邸茶室」として設計している。この建物は、木造2階建てであり、「一円庵」の写しと思われる茶室三畳台目の他、八畳の広間に加え、2室の水屋、寄付、厨房を備えた本格的な茶室である。茶庭は、外腰掛や内腰掛、雪隠、蹲等が巧みに配されている（写真3・4）。「大野邸茶室」の全ての茶室にも、床暖房の計画はあったが、図面には「中止」との記載が残されている（図9）。



写真3 「大野邸茶室」茶室三畳台目躰口



写真4 「大野邸茶室」茶庭

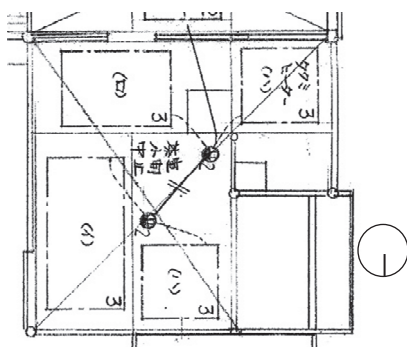


図9 「大野邸茶室」茶室三畳台目床暖房の中止

4-1 風炉先床の三畳台目茶室

「大野邸茶室」の南東角に位置する茶室三畳台目の平面形状は、点前座の上座に床を客座に向けて並べて設けた風炉先床で、三畳台目中柱台目切である。

「大野邸茶室」と同じ三畳台目は計129件存在するが、風炉先床中柱台目切に限ると「一円庵」を含む6件が該当した（表8）。

表8 風炉先床深三畳台目中柱台目切茶室

茶室名	造営	好み (創建者)	床の間と 躰口の関係と 貴人口
南禅寺金地院 「八窓の席」	寛永5年(1628)	小堀遠州	躰口正面
江戸千家 「一円庵」	宝暦4年・不白没 (1754-1807)	川上不白	躰口正面
陽明文庫 「虎山荘」	1944	不明	躰口右 貴人口あり
興亜火災海上 保険 「愛宕荘」	1995	レーモンド 設計事務所	躰口右
豊国神社 「豊秀舎」	不明	不明	躰口正面
「目黒の家」	不明	不明	躰口正面 貴人口あり
「大野邸茶室」 茶室三畳台目	1990.9 設計	中原暢子	躰口正面

「一円庵」の類似の間取りは、「愛宕荘」が挙げられるが、貴人口がなく、躰口正面に床の間を構える配置は、「一円庵」のみであった。

4-2 「一円庵」について

一円庵は、七代蓮々斎(1846-1908)により移築されたとされている。1869年に茶屋の他玄関、

寄付と共に現在地である池之端に移築され、1962年に東重宝（現在の東京都指定有形文化財）に指定された¹⁶⁾。「床は躰口の正面に配し、…（中略）…茶道口は方立口とし、給仕口は花頭（火灯）口としてその位置は客座付の便利の良いところに配されている。点前座床左脇の下部吹抜きの所を風炉先として一重棚を付しているのもその形式としては珍しい構想である。」¹⁷⁾といわれている。

4-3 「大野邸茶室」茶室三畳台目の材料や寸法等による比較

「大野邸茶室」茶室三畳台目と「一円庵」を材料や寸法等で比較すると、次のようになる（表9）。「大野邸茶室」三畳台目には、点前座に二重棚の釣棚がある。また、屋根には突き上げ窓がある。この突き上げ窓には、板戸が付いており、室内の明るさの調整ができる。さらに連子窓の幅が5尺4寸と短く、畳からの高さも1尺4寸5分と低い。また、下地窓3（点前座奥）が配されている。突き上げ窓や中柱、床脇の吹抜きの有無、釣棚の種類等、異なる部分も多々みられる。

4-4 「大野邸茶室」茶室三畳台目と「一円庵」の図面による比較（表10）

平面図を比較すると、畳の敷き方に違いがみられる。「一円庵」は、三畳の丸畳を横並びにしているのに対し、「大野邸茶室」茶室三畳台目は、三畳のうち一畳を直行した向きに敷く深三畳台目である。連子窓の幅は、「一円庵」に比べると、「大野邸茶室」茶室三畳台目のほうが狭くなっている。これは、「一円庵」にはそれに附属する外腰掛はなく、同敷地内に建つ復元された「蓮華庵」に付随する外腰掛を使うが、「大野邸茶室」茶室三畳台目は、この茶室に付随する外腰掛が南面にあるため、それが可能であったと推察できる。「一円庵」西面の下地窓1は、外部に刀掛があるため、中央に寄っているが、「大野邸茶室」茶室三畳台目は、八畳茶室の入側に面する戸袋があるため、それを避ける形で北側に寄せて配置をしている。中柱にも違いがみられる。「一円庵」の中柱は、曲柱となっているが、「大野邸茶室」茶室三畳台目では、直柱を採用している。さらに、「一円庵」にみられ

表9 「大野邸茶室」茶室三畳台目と「一円庵」の材料や寸法等による比較（単位：尺）

茶室名		「大野邸茶室」 茶室三畳台目	「一円庵」
所在		埼玉県大宮市 (現：さいたま市)	東京都台東区池之端
		大野邸邸内	江戸千家
建設時期		(設計：1990.9)	宝暦4年～不白没 (1754～1807) 1869年に移築
方位	躰口	西	西
勝手		本勝手	本勝手
床の間	形式	本床（畳敷）	本床（畳敷）
	位置	風炉先床	風炉先床
	床框	(不明)	赤松半丸太
	床柱	(不明)	節付磨き丸太
	径	(不明)	0.30
炉	種類	台目切	台目切
	中柱	(不明) (直)	赤松丸太 (曲)
	径	(不明)	(不明)
	吹抜高	2.19	2.20
天井	釣棚	二重棚、桐、竹	一重棚
	床の間	鏡天井、平天井	鏡天井、平天井
	台目	ノネ板、シノ茅竹、平天井	棹縁細竹蒲天井、平天井、落天井
	床前	がま、平天井	竹棹縁野根板天井、平天井
	躰口前	掛込天井	掛込天井
突き上げ窓	有 (板戸付)	有 (板戸付)	無
	1.60×2.00		
躰口	高×幅	2.26×2.10	2.28×2.05
	高×幅	5.19×2.02	5.00×2.00
茶道口	建具	方立口、奉書タイコ貼	方立口、白奉ばり
	高×幅	3.92×2.00	3.87×1.97
給仕口	建具	火灯口、奉書タイコ貼	火灯口、白奉ばり
	高×幅	1.92×1.87	1.83×約2.00
下地窓1 (躰口横)	畳からの高	1.45	1.40
	高×幅	2.34×2.24	2.25×1.98
下地窓2 (躰口上)	畳からの高	2.34	2.28
	高×幅	約2.4×約2.4	無
下地窓3 (点前座奥)	畳からの高	1.30	—
	高×幅	2.40×5.20	1.52×4.70
連子窓	畳からの高	1.45	2.40
	高×幅	2.40×5.20	1.52×4.70
壁	仕上げ	京土、よこ波塗、スサ入	京壁
	腰貼	みなと紙、白	湊紙、白
	腰貼高	1.80、0.90	0.90
参考資料		中原暢子：『大野邸茶室工事設計図』（1990）	北尾治道：『茶室の展開図』（1970）

る床脇の吹抜き（高：1尺7寸4分）は、「大野邸茶室」茶室三畳台目にはみられない。その他、茶道口、給仕口の太鼓襖の引手高さが、「一円庵」よりも高い位置となっている。

表 10 「大野邸茶室」茶室三畳台目と「一円庵」の図面による比較

茶室名	「大野邸茶室」茶室三畳台目	「一円庵」
平面図（北が上）		
西展開図		
南展開図		
北展開図		
東展開図		
床脇展開図		

数値の単位はmm

以上のことから、「大野邸茶室」茶室三畳台目は、「一円庵」の完全な写しではないことが明らかになった。

「大野邸茶室」の平面図の中心に位置する八畳広間の床前畳には「家相の中心」との表記があり(図10)、鬼門と裏鬼門を結ぶ線上に水回りを避ける等といった家相による制約の影響もあったと推察できる。

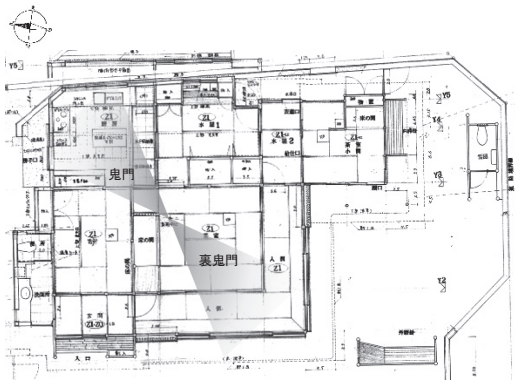


図10 「大野邸茶室」の鬼門裏鬼門

4-5 まとめ

「大野邸茶室」茶室三畳台目と「一円庵」の差異を以下にまとめる。

- ①点前座にある釣棚は二重棚である。
- ②突き上げ窓がある。
- ③連子窓の幅が5尺4寸と短く、畳からの高さも1尺4寸5分と低い。
- ④畳の敷き方は深三畳台目である。
- ⑤西展開図の下地窓1が給仕口寄りとなっている。
- ⑥中柱を直としている。
- ⑦床脇壁面が吹抜きとなっていない。
- ⑧茶道口・給仕口の引手の高さが4尺9寸3分(1,495mm)と高い。
- ⑨中柱のある控え壁に隠れて、東展開図では確認できないが、点前座東に下地窓3を設けている。

5. 結論

中原の写しにおける本歌との差異を分析すると、茶人建築家としての評価の一端をみるこ

ができる。

5-1 結論

中原が設計した草庵茶室の写しと思われる3室は、いずれもほぼ本歌と同じ方向で設計されていた。図面等との比較の結果、中原の写しは本歌を忠実に再現しようと試みているが、その反面、細部においては大胆な差異がみられる。それは、茶事を行う側の機能性や使い勝手を重視しているという点である。

「森邸」茶室三畳台目は、茶道口を2つ設けることで、亭主の動線の面から、自邸「茶室のある家」二畳台目の「暢庵」は、人工照明や床暖房等の設備的な面から、さらに、「大野邸茶室」茶室三畳台目は、点前座の採光をとるために、点前座東に下地窓を付けることで、使い勝手を重視した設計がされていることが明らかになった。

5-2 今後の課題

本歌を写すにあたっての各流派における掟の有無やその内容、施主の茶道流派についての確認はとれていない。そのため、それらを明確にすることで、論証をより確かなものとするのが今後の課題である。また、本論では小間の写しにおける中原の設計思想に触れることが出来た。さらに、今後は広間やその他全体の構成をとりあげること、中原の茶室建築設計における特質について、さらに解明してゆきたい。

謝辞

最後に、元所員の白井克典氏、同大島康治氏、江戸千家家元十代川上宗雪氏には、ヒアリング調査にご協力いただいた。また、大野まさ子氏、松村博行氏には、「大野邸茶室」の茶庭見学にご協力していただいた。厚く感謝申し上げる。

図表出典

図1) 中原暢子:「103配置図1階平面図」,『森邸新築工事設計図』,1987.2.14 下部の寸法線は場所を移動

図2) 中原暢子:「茶室2畳台目平面図」,『中原暢子の木造住宅設計図面集』, p.181より抜粋。図面作成は1985.12.18との記載あり

図 3) 前掲書図 2)「堀内家長生庵実測展開図 茶室 2 畳台目展開図」, p.183 より抜粋。図面作成は 1985.10.21 との記載あり。元所員の大島康治によると、「茶室のある家」の設計は、作図も含め所員は全く関与せず、中原がひとりで行ったという

図 4) 前掲書図 2)「503 床暖房工事設計図」, p.205 より抜粋

図 5) 前掲書図 2)「305 電気設備電灯コンセント図」, p.197 より抜粋

図 6) 北尾治道:「ち /62/ 長生庵」,『茶室の展開図』, p.153, 光村推古書院, 1970 より抜粋

図 7) 浅田晃彦:「黙雷庵を建てる」,『不白の跡を探ねて』, p.107, 1979.12 より抜粋

図 8) 覃斎儀卿:「19 不白黙雷庵」,『囲おこし図』, 出版年不明。マイクロフィルムの資料から抜粋。図はすべて展開した状態だが、中柱のある袖壁により、点前畳の一部が隠れている。材料については、ほとんど記載されておらず、不明な点が多い

図 9) 中原暢子:「503 床暖房設備工事」,『大野邸茶室工事設計図』, 1990.9.11 より抜粋

図 10) 前掲書図 9)「103 1 階平面図」の八畳広間より抜粋

表 1) 元所員白井克典より譲り受けた中原設計の実施図面等により筆者が調査

表 2) 根岸照彦:「3 畳台目」,『茶室の解明 平面データ集成』, pp.56-59, p.98, 建築資料研究社, 2001.11 を元に上座床平三畳台目中柱台目切を抽出し、「森邸」茶室三畳台目を追加し、筆者が作成

表 3) 前掲書図 1)「103 配置図 1 階平面図」,「109 茶室展開図」及び前掲書図 6)「ふ /81/ 不審庵」, pp.196-197 より筆者が作成

表 4) 前掲書図 2) 及び前掲書図 1)「ふ /81/ 不審庵」より筆者が作成

表 5) 前掲書表 2)「2 畳台目」, pp.48-51 を元に筆者が二畳台目中柱台目切を抽出し、中原自邸「暢庵」を追加し、筆者が作成。開口がないものは、貴人口からみた床の間の位置を記載

表 6) 中原暢子:「茶室のある家」,『新建築』, pp.42-43, 198.10, 前掲書図 6)「ち /62/ 長生庵」, pp.153-154, 及び図 8) を元に、筆者が作成

表 7) 前掲書表 6) 及び前掲書図 8) より筆者が加工。黙雷庵については、起こし絵図から抽出したため、

平面図に壁厚や柱、開口部位置は表現されていない
表 8) 前掲書表 2) を元に風炉先床深三畳台目中柱台目切を抽出し、「大野邸茶室」茶室三畳台目を追加し、筆者が作成

表 9) 前掲書図 9)「103 1 階平面図」,「111 茶室小間展開図」, 及び前掲書図 6)「い /6/ 一円庵」, pp.16-17 より筆者が作成

表 10) 前掲書表 9) 及び前掲書図 6)「い /6/ 一円庵」より筆者が加工。「一円庵」の床脇展開図は、伊郷吉信:「江戸千家の建築と自然 その 1」,『住宅建築』, No.434, p.70, 建築資料研究社, 2012.8 より抜粋

写真 1) 中原暢子:「茶室のある家」,『新建築 住宅特集』, p.42, 新建築社, 1986.10

写真 2) 千宗左・村田治郎・北村伝兵衛:「堀内家 長生庵 内部 3」,『茶室 設計詳図とその実際』, p.217, 淡交社, 1959.11

写真 3) 筆者による撮影 (2018.12.3)

写真 4) 筆者による撮影 (2018.12.3)

注

- 1) 林屋辰三郎他 7 名:「写し」,『角川茶道大事典 普及版』, p.147, 角川書店, 2002.9
- 2) 前掲書注 1):「不審庵」, p.1187
- 3) 東京都教育庁地域教育支援部:東京都文化財情報データベース。
https://bunkazai.metro.tokyo.lg.jp/jp/search_detail.html?page=1&id=167
- 4) 川上宗雪監修:「不審庵の仕様」,『不白筆記付・孤峯川上不白道具帳写』, p.24, 中央公論新社, 2019.11
『不白筆記』は、江戸千家の祖川上不白が師如心斎の茶説を聞き記した書物で、成立時期は宝暦 8 (1758) 年、安永 2 (1773) 年の説がある
- 5) 中原暢子:「現代住宅の空間構成Ⅲ “極小空間をつくり住まう その心理的考察を含めて”」,『東京家政学院大学紀要』, 第 28 号, p.8, 3 東京家政学院大学, 1988.8
- 6) 元所員大島康治へのヒアリング (2018.10.27) による
- 7) 堀内仙鶴 (1675-1748) は、表千家六代千宗左に学び、堀内家初代家元であるが、以前は俳諧師であった。江戸の生まれで水間沾徳 (1662-1726) の門下である。とともに書画も堪能であった。山田宗徧 (1627-1708) の門弟堀内浄佐 (1612-1699) の養子になって茶道界に

入った

- 8) 前掲書注1) : 「長生庵」, p.924
- 9) 川上宗雪: 「第4章 黙雷庵の茶頭」, 『茶人 川上太白』, p.49, 茶の湯研究所, 2007.11
- 10) 「起こし絵図」とは、平面図に展開図を加え、貼り付けや差し込みによって組み立てると立体になる建築図面であり、茶室の設計や茶室の写しを作る際に参考とするもので、江戸時代に盛んに作られた
- 11) 前掲書図7), p.106
- 12) 前掲書注1), 「黙雷庵」, p.1350
- 13) 如心斎は、家元制度の基礎を築き、七事式を制定するなど茶道人口増大の時代に対応する茶の湯を模索

した人物であり、その師は表千家六代原叟（覚々斎）（1678-1730）である

- 14) 前掲書注9), 「口絵解説 15 16 阿弥陀堂釜 琳光院 黙雷庵 常什」, p.153
- 15) 中村昌生: 「川上太白の茶室」, 『川上太白の茶』, p.84, 講談社, 1991.7
- 16) 伊郷吉信: 「江戸千家の建築と自然 その1」, 『住宅建築』, No.434, p.70, 建築資料研究社, 2012.8
- 17) 前掲書図6) 「6 一円庵〈いちえんあん〉」, p.254 「火灯口」は「花頭口」と記す場合もある

(受付 2020.3.25 受理 2020.7.7)